比企の畑から

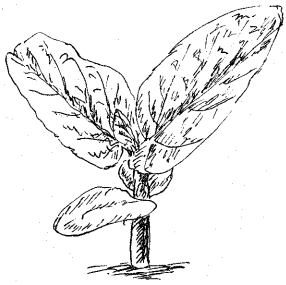
断念すること

小宮山　洋夫

梅が実をつけ、サクラが散り、気温も上がるツツジの開花を迎えると、畑の人影が、一段と濃密になる。

トウモロコシ、オクラ、カボチャ、キュウリ、夏ダイコン、サヤインゲン、エダマメなどの種まき、サトイモ、ショウガの植えつけがはじまる。

ヒマラヤ山麓が故郷のキュウリは、涼しい気候を好むが、夏の高温にも強い。春、ツツジの花の咲くころ種をまくと、初夏から夏、晩春にまくと夏から秋、夏にまくと、秋、収穫できる。なるべく早く収穫したいと、この辺りでは、春、種をまく。



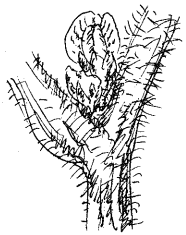
ダイズ（エダマメ）の芽生え

種をまくと、その周りに竹の支柱を四本立て、ビニールを張る。ウリハムシの食害を防ぐためである。この手当てを省くと、葉は食べられてボロボロになってしまう。

自前の穫りたてのエダマメは、本当においしい。比企の畑を借りた、はじめての春、エダマメの種を、二週間ほどずらし、二回に分けてまいた。

どちらも順調に育っているように見えた。はじめにまいたエダマメは、やがて、花を咲かせ、莢をつけ、その中に豆を太らせた。「よく、できましたね」

地主のF氏から声をかけられた。やや怪訝そうな表情が気になる。



ダイズ(エダマメ)の花

収穫したエダマメは、好評のうち食べ尽くした。ところが、後まきしたものは、莢の中の豆は茶変、萎縮していて、まったく食用にならなかった。開花期に発生した虫の食害を受けてしまったのだった。

この体験から昨春、さらに、三〜四回に分けて、種をまいた。普通、エダマメのダイズは、初夏から夏にかけて実を太らせ、収穫する。驚いたことに、早めにまいたものも、おそくまいたものも、ことごとく虫にやられ、食べ物にならなかった。

たまたま、園芸店で求めた種の他に、畑仲間のH氏からいただいたクロマメの種もまいていた。このクロマメは夏の盛りの中でも、花を咲かせない。

「エダマメは、まだ、とれないの?」

「夏が終わってしまうじゃない」

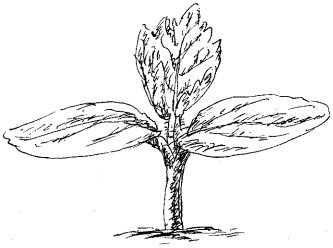
家族は、栽培者の非力を責める。クロマメは、最後の頼みの綱だ。

秋めいたころ、ようやく花をつけた。そして、ゆっくり実を太らせていく。収穫は、秋たけなわ、十月に入ってから。虫害を全く受けない見事に太ったマメが穫れた。マメの皮はやや黒みを帯びている。とてもうまい。深みがある。ゆっくり生育する晩生のために、開花期が、虫の発生する時期と重ならなかったのだ。氏の訝しげな表情も、これで氷解した。

ここの自然は、晩生のエダマメ向きなのである。それは、早生・中性のエダマメの栽培を止め、夏のエダマメを断念することを迫ってくる。

虫害を防ぐ第一の方法は、虫とたたかうことである。作物に薬を振りかける、あるいは、防虫ネット（寒冷紗など）で覆ってしまう。

「われわれは自然の作物の美しさと豊さの上に、あまたに多くの作為を加えすぎて、これをすっかり窒息させてしまったのだ。けれども自然はその純粋さの輝くいたるところで、われわれのはかなくつまらない試みに赤恥をかかせている……」（『エセー』第一巻　第三十一章　モンテーニュ　原二郎訳　岩波書店）


キュウリの芽生え

モンテーニュの語るように、第一の方法は、自然に対して、恥ずかしい。

同じ土地の畑で、栽培を続けていると、さまざまな虫の発生するそれぞれの時期がつかめてく

る。虫害を防ぐ第二の方法は、虫たちが自然を謳歌する時期をやり過ごすことである。それは、風土の特性を受入れ、その他の時期での栽培を、断念することだ。これは、案外むつかしい。

人には、何かにせき立てられる感覚が絶えず付きまとっている。それが、すこしでも「早くつくりたい」「早く食べたい」とする焦りとなってあらわれる。「エダマメは、夏の食べ物」という思い込みもある。動物は、自然に反することは、はじめから断念している。それに対し人は目的を設定すると、異常な情熱を傾ける。人は、自然を克服しようとする。

キュウリの雌花

昨年、キュウリの種を、晩春、フジの花の盛りにもまいてみた。その際、ビニールの囲いを施さなかった。それでも、ウリハムシの被害が見られなかった。すでに、虫は姿を消していたのだった。畑の景観を損ねず、手間も省け、しかもスピーディーに育ち、実をたくさんつけた。

ところで秋のクロマメのエダマメがおいしいのは、それが、クロマメの旬だからである。

（家庭菜園研究家）

カット　筆者